

始皇帝が行く！

ハルデリム

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この世界の始皇帝が、黄泉がえりして、アカメが斬る時代の国を基に戻す物語である。この作品は文才皆無の作者が、久々にアカメが斬るを読みなおしたら、舞い上がってきた作品です。

苦手な人はブラウザバックをしてください。

なお、コメント、誤字脱字報告等お願いいたします。

第一輯

目次

1

第一斬

「これは、とある時代の一室で王とその臣下の会話である。

「はあ、これでこの国も大丈夫だよ。どうやら、僕にはもう時間がないみたいだ。」

「・・・」

「最後に一つ、お願いをしてもいいかな。」

「何なりと申し下さい。」

「そうかしこまらないで、これは、お願いなんだから。」

「じゃあ、言ってみろ。」

「この国を最後まで守ってくれ、親友。」

「ああ、守つてやるよ。だから安心して行け。」

「ありがとう、じゃあ、先に待つてるよ。」

「こうして王は息を引き取られた。

そして、年月が過ぎ、その王は再びこの地に戻ってくる。

「さあ、二度目の人生だ。今回は好き勝手やらせてもらおうか。」

「この人物こそがこの帝国の創始者にして王、

始皇帝、ソロモン

そして、王は歩みだす。

だがここで一つ、問題が起きた。

「そういえばここ何処？」

王、二度目の人生の第一歩が止まった瞬間であった。

それから、数年が過ぎ、彼はいま帝国・・・つまり彼の国へと向かっている。

「帝国へ向かぞ〜♪探検、探索、ラン、ラン、ラン♪」

上機嫌な始皇帝であった。

「ささ、あの子たちは元気にやつてるかなあ〜？」

ここに至るまで始皇帝は、とある村に流れ着いた。

その時に助けられた代わり村を守るということで数年間、彼は退役軍人ということ

で、その村を守りながら、何人かの弟子を持っていた。

正確には弟子と言うよりか、暇だったか戦い方を教えていただけである。そしていつ

間にか師匠と呼ばれ始めた。

これには始皇帝もびっくり、暇つぶしをしていたら弟子ができた。まあ、弟子なんて

取ることもなかった始皇帝からしたら初体験で、喜んで受け入れた。

そして、その村が重税により苦しんでいるということ村を出た弟子を見に来たので

ある。

弟子は三人、名前はタツミ、サヨ、イエヤスである

「と言うわけで、僕の国に戻ってみただけど、…腐ってんね。」

始皇帝だからか、その場の雰囲気だけでこの国の現状をある程度は想像することができた。

「まあ何百年もたってるから腐っていても仕方ないんだろうけど…これはタツミ達大丈夫かな？ さつさと見つけて、三人とも回収するしかないか。」

この帝国の現状を知って、田舎にいた無知な三人がやっていけるわけがない。

切り替えて、始皇帝は三人を探す。幸いなことにイエヤスとサヨはもうすでに、いるということ知っている。襲ってきた、野盗を逆に襲い、ひねりつぶした。

さつさと二人を探そう言うことで、急いで探す。

方法は簡単、匂いで分かるでわかる。

そんな超人的な能力でたどり着いた場所は倉庫のようなどころだった。

「すごい、悪臭だ。これはもしかしたら…二人！ 無事かい！」

勢いよく扉を開ける。

「この声は…し…し…し…しょう…か？」

が、もうすでに手遅れだったようだ。

「イエヤス!？」

急いで近づき、彼を抱える。

「イエヤス!?大丈夫!？」

「し…しよう…気を付けてください…あいつら…俺たちを騙して、サヨを…」

「もういい、しゃべらなくていい。今は自分が助かることを第一に考えてくれ!？」

始皇帝は急いで応急処置をしようとするが拒まれる。

「俺はもう…むりです。…へんな薬を…入れられて。…たぶん、数日後には…もう…」

「駄目だ!君だけでも「師匠!」…なんだ、」

「俺の、そして…あいつの願いです。聞いて…ください。」

「…何。」

イエヤスの思いを彼は優しく受け止める。

「この国を…止めて…してください。」

「わかった。もう安心して眠りな。」

そしてイエヤスは眠る、最高の笑顔で瞳を閉じる。

「だれだ!そこにいるやつ今すぐ出てこい!？」

そして、警備隊が気付く。

「君たちか…僕のかわいい弟子を手にかけてのは!？」

始皇帝は、素手で警備隊を襲う。

「ぎやああああああ助けてくれ！俺は、俺は違う！俺はやってなあああああああ」
数分後

あるものは首を折られ、またある者は四肢が切断されており、もしその場を見ていた人がいるなら、きつとりバース待ったなしであろう。

「タツミは、まだ無事みたいだ。」

始皇帝は、倉庫の方を見ながら、言う。

「さようなら。」